

研究論文 Original Paper

神聖な、生きられる広場の景観
——バクタプール（ネパール）

伊藤 哲夫*

Sacred, “Lived” Square in Bhaktapur, Nepal

Tetsuo ITO*

Abstract: In discussing about a historical Town Square “Dattatreya-Square” in the historical city Bhaktapur, Nepal we pointed out the following:

a) The attractive square was not the creation of one architect or planner; rather, it evolved gradually over centuries of interventions by many personalities to fulfill the needs of their times. Thus, the Square “happened to be completed.” The fact that people are never bored in this Square comes from this circumstance.

b) The fact that the Square is “lived (gelebt)” as a place for market, to play, to work, to celebrate simultaneously for the existence of the people.

Keywords: Nepal, Bhaktapur, needs of times, “lived (gelebt)”

要 旨：本論はネパールのカトマンズ盆地に位置する旧王国の首都バクタプールのひとつの広場、都市の核として最も古くから機能してきた「ダッタトレヤ広場」について、広場の空間構成を分析し、また「生きられる」広場という視点から考察したものである。主なる点として、(A) 広場の空間構成において全体としてひとつの軸線がとうり、均整がとれた空間だが、細部においてはいくつかのずれが見られ、不整形な部分が多く見られる。均整を保とうとする部分と不均衡へと傾斜する部分とのせめぎあいが広場を生き生きとさせていると指摘し、長時間過ごしても退屈しないこの広場の空間的魅力はある一人の建築家あるいは計画者のプランにもとづいて完成したものではなく、それぞれの時代の要求を満たすかたちで広場の構成要素が形成され、長い時間の集積の中で、いわば「偶然に」形成されたためだと指摘する。そして (B) 市が開かれ、憩いの場となり、また仕事の場ともなり、祭礼の場ともなる、そしてそれらの行為が同時に繰り広げられるこの広場は住民の実存に欠かせない存在として「生きられて」いることを指摘する。

ネパールの古都バクタプールを訪れたのは9月のことである。当地で農業指導をしている知人の協力者であるネパール人、それも山登りで名高いシェルパ族の若い男の案内で、カトマンズからバスを乗り継いで行った。カトマンズの雑踏を離れてでこぼこみちをおんぼろバスで田園地帯を走り40-50分位だろうか、畔道のようなところにあるバス停で降りる。

この辺は2毛作で、小麦の収穫を終えた後、植えたばかりの苗が育ち青々とした豊かな稲畑が広がり、その向こうは小高い丘になっている。その丘を覆うように密集した集落が広がっている。背後から山すそが始まり、その向こうにヒマラヤの高峰が連なる神々しいばかり

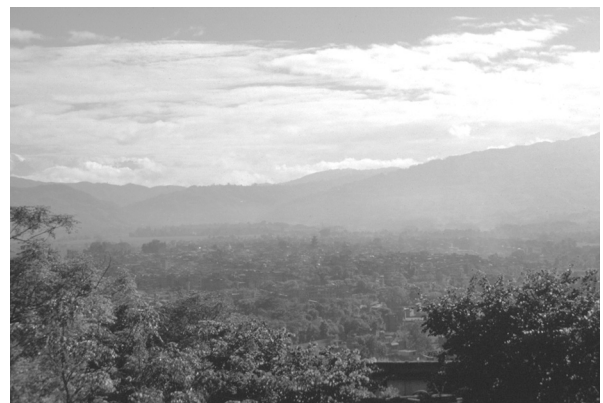


図1 小高い丘に形成された朝霧のバクタプールの全景。周囲は畑、背後にヒマラヤの高峰が遠望される。

* 工学部建築デザイン工学科 教授

Department of Architecture, Faculty of Engineering
Professor

の景観が楽しめる筈であったが、大気は充分には澄んではなく、見られなかった。

土色の煉瓦作りの家々が密集して丘の上に立つさまは、イタリアの山岳都市を思い起こさせる。それはマラ

リア蚊を恐れ、また防衛上の観点から丘の上に形成されたと聞いたが、18世紀までにマッラ王朝から独立した王国の首都としてカトマンズやパタンなどの都市と覇権を争ってきたこのバクタプールも同じような理由からな

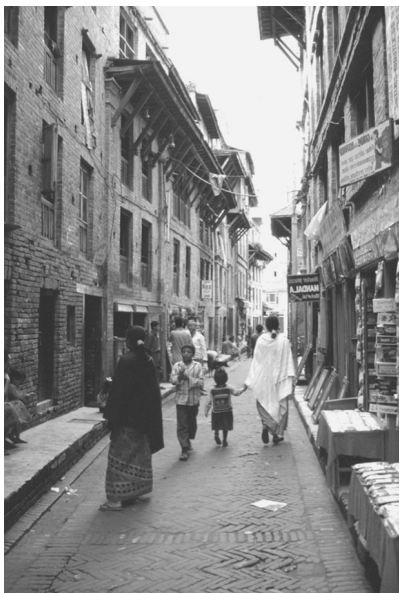


図2 街路の景観。建物群は街路と段差があり、老人が座っていたり、商品が並べられる。



図3 3階居間の街路を見下ろすようにもうけられたバルコニー。方杖に支えられた深かい軒の出。



図4 1階の店舗。肉屋で、羊肉が店先に並べられている。

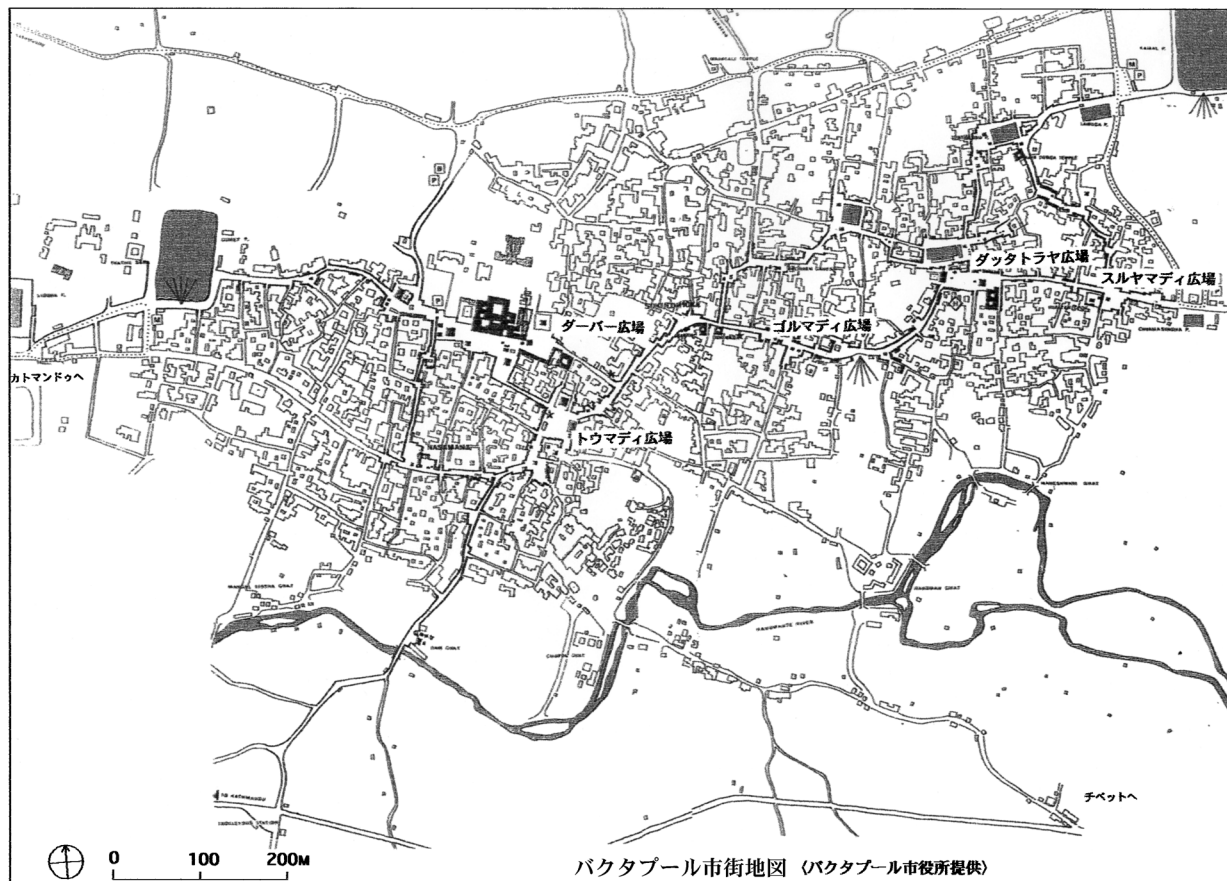




図5 同じく1階の美しい店舗。八百屋。

のだろう。立派な都市門はあるが、城壁らしきものは見当たらない。が、都市周囲の建物群がその役割を果たしてきたのであろう。

「丘の尾根づたいに形成された都市集落」

石ころだらけの坂道をのぼり、集落の中に足を踏み入れる。3-4階の建物が軒を並べて立つ高密度の集落だ。建物も街路の舗装も土地の土を固めたごつごつとしたむき出しの煉瓦造のためか、またそこそこに歩いている家畜やその糞が臭いを発するのと一緒になって、土の臭いがぶんぶんと街中に漂っている。大通りの幅員は6-8mだろうか、5m程の狭いところもあり、幅員は一定しない。ところどころに膨らみがあり小広場が形成され、そこには筵が広げられ、眼にも鮮やかな赤い唐辛子が沢山干されている。野菜売りや土産物売りも露店をひろげている。通りには遊ぶ子供達の姿が多い。

この通りを特徴づける要素の一つとして、車が殆ど走っていないから街路には車道と歩道の区別がないのは当然としても、建物群が一種の基壇の上に立っていて、道路面と50-60cmの段差がある点である。その幅は60cm-1mと一定しないが、そこには店の売り物がひろげられていたり、老人達が座って休んでいる姿が見られる。

煉瓦造の建物だが、一階店舗部分には上階を支える野太い木の列柱が立ち、柱とその柱の部分はチョコレート色や濃緑色とさまざまな色彩に塗装され、プロポーションも良い美しいファサードとなっており、それらが連なっている（注1）。この街の住民のセンスの良さが感じられる。小さな店舗は野菜や果物を売る八百屋、米、麦などの穀物商、肉屋、雑貨屋、それにヨーグルト店などが多いが、農産物に限っては品物があふれ、豊かさが感じられる。一方、肉屋では冷蔵庫が無いいためか、肉が板の上に無造作に置かれ、店先に肉片が吊り下げられ、蠅が群がっている——現金収入が少ないことを物語っている。

街路を歩いていると上の方から街路を見下ろす沢山の好奇な視線に気付く。居間となっている3階部分の美しい彫刻を施した蔀戸の格子をとうして、道行く人々を眺めている眼だ。

この都市集落の建物は寺院にしても住居にしても、店舗と同じくプロポーションが良く美しいものが多い。軒の出が非常に大きくしたがつて大屋根で、庇護感とそして建物に陰影を与えている。深い軒の出を支えるには方杖という斜材が必要となるが、力強い方杖が家形を特徴づける。

屋根裏というか屋階の空間は厨房と食堂になっていて、竈の神様と関係があると思うが、家を守る神棚・祭壇もある。一部は屋上テラスとなっており、洗った食器を乾燥させたり、唐辛子、豆や野菜などを干したり、洗濯物を干す。また毎朝祭壇にお供えする花を植え木鉢で栽培したり、ときには鶏を数羽飼っている。主婦は仕事をしながら幼児の日光浴もさせられる。水は毎日朝夕数回公共の水場「ヒティ」からこの最上階まで運ばねばならず、大変な労働だが、温暖の地でのテラスの効能と神棚・祭壇を置く位置（注2）、それに排煙の関係等からこうした最上階の使われ方となったのであろう。主婦の仕事場として驚くほど合理的な空間である。



図6, 7 街なかのパティ。上図はダットレヤ寺院裏の小広場に面してあるパティ。男や子供達が休憩している。物を売っている人の姿も見られる。

1階は前述のように店舗かあるいは物置か家畜小屋、2階は寝室階、3階は居間階となっている。天上高はどの部屋も2mほどで、極く低い。高密度の都市集落では、上階の方が日照・通風の条件が良いからこれも合理的だ。3階の通りの側は上述の深い軒の出を支える方杖を利用して居間と連続するバルコニーとなっている。方杖にも美しい木彫りが施されているが、部屋の内側に水平に吊上げる方式の蓐戸も同じで、職人の驚くほど高い技術とセンスの良さが光る。街路空間を美しく飾るエレメントである。

「街なかの縁台」

大通りを更に歩く。あちこちの建物の壁や小広場の隅にヒンズーの神々を祭る祠があり、献灯する人達の姿が見られる。また「ダルマシャーラ」あるいは「パティ」と称される住民に開かれた街の縁台のような公共空間が、通りに面してところどころにある。独立して立つものもあるが、多くは既存の建物の一部か、付加されたかたちのものだ。広さは8帖間位から大小まちまちの、屋根に覆われた板敷の開放的な小屋で、誰でも使ってもよいという。もともとは乞食僧や巡礼僧のための休息・宿泊施設だが、今日では、遊んでいる子供達、昼寝する老人、ゲームに興ずる若者達、野菜を広げて商売をする人、音楽を奏でる人と、実にさまざまに利用する姿が見られる。一時の物置に使用する人もいるらしく、米俵が積まれているところもある。またここで老床屋さんが店開きをして、バリカンで子供の髪を切っている微笑ましい光景も見られる。「街なかの縁台」といってもいい。

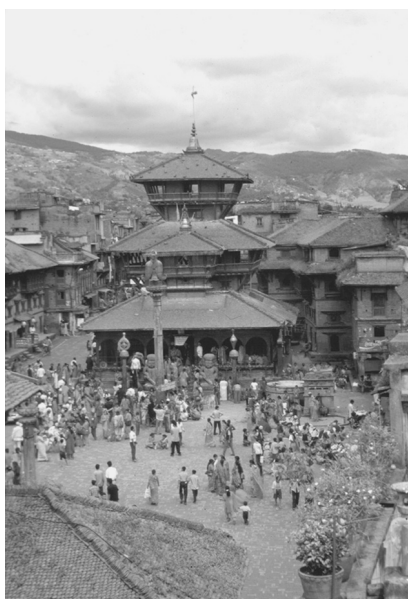


図8 ダットトレヤ広場を西から鳥瞰する。手前の屋根はビムセン寺院のもの。正面はダットトレヤ寺院。

街路空間を活気づける世界でもまれな公共施設ではあるまいか。

この施設の管理・保全是各カースト毎に組織されている互助組織「グティ」が分担してこれを行うというが、常にきれいに清掃されている。また誰か特定の人が長時間にわたってそこを占拠するようなことはない。

ここには近代になって、どんな細街路でも我が物顔に進入してくる自動車の増大によって失われてしまった本来の住民のための街路がある。生活を営む上で真にこの街路を必要とし、利用する生き生きとした住民の姿がある。土の、大地の匂いが漂い、なぜか優しい、人の心を和ませる多くのものがこの街路にある。

「ダットトレヤ広場—最も古い都市の核」

緩やかにカーブを描く大通りを歩いて行くと、幅員が絞られやや狭くなったところで右手に一気に広場が拓ける。ダットトレヤ広場だ。

バクタプールはタチュパル地区、いわば山の手と、下町との2つの地区に分かれており、ダットトレヤ広場は山の手を中心だ。バクタプールは9世紀頃インドと



図9 ダットトレヤ広場。西からダットトレヤ寺院に向かって見る。手前は舞台タブ。2本の石柱が天に向かって屹立する。

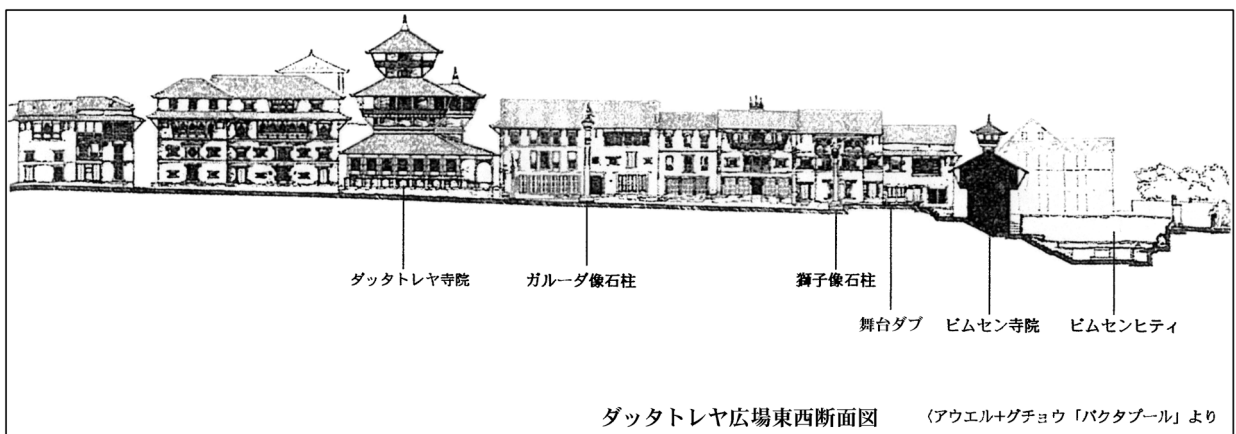
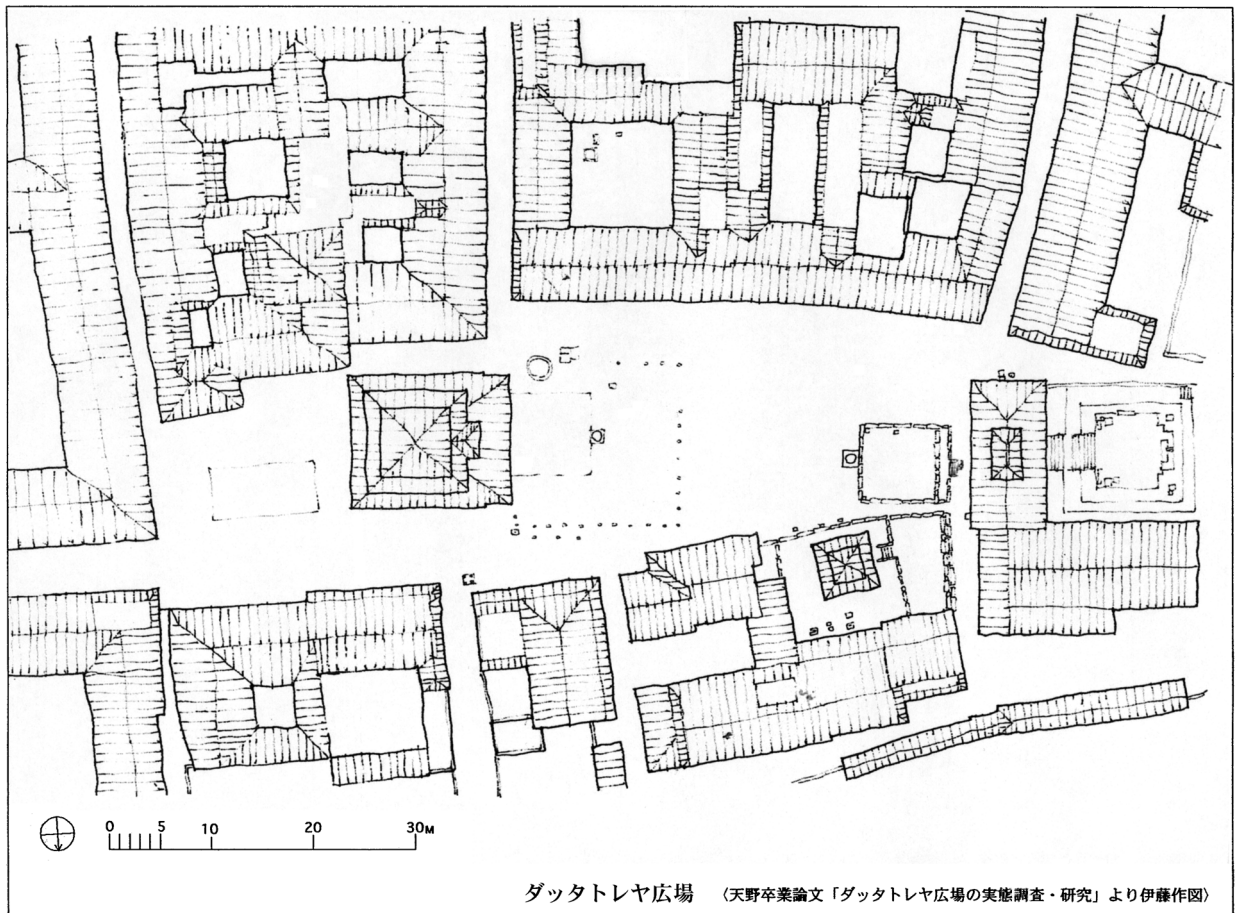


図10 ダットトレヤ広場。東からビムセン寺院に向かって見る。

チベットの交易の中継地として、商人達が住み着き、これらの人達によって商店や倉庫群からなる集落が形成され、成長・発展した都市だ。今歩いてきた大通りは尾根づたいにはぼ東西にS字状にカーブして、チベットへと通ずる昔の交易路だ。ダットトレヤ広場を中心に集落が形成されていったというから、この都市の最も古い核といえる。だからこの山の手には店舗などが多く、活気に溢れていたのだが、17世紀以降交易路に沿って西に拡大するかたちで形成された下町に今日では店舗や工房が多く集まり、また王宮もあることから観光客が多く訪

れ、山の手は静かな住宅地になりつつある。

広場には目を見はった、そしてこの広場に身をおき、やがて時間がたつにつれ次第に心が和むのを感じた。東西に細長い矩形（約45m×25m）をしていて、東と西の端、それに西北端に寺院が3つあり、周囲を2-3層の建物に囲まれた広場（注3）だが、絶妙な空間構成だ。広場と周囲の建物とのスケールの良さ、個々の建物の質の高さによるものだが、加えて広場の東西の端の近くに寺院の神々を守護するガルーダ像や獅子像をいまだく2本の石柱が天に向かって対峙するように立ち、広場の空



間をひきしめている。緊張感があり、また品格を感じさせる広場だ。そして美しい3つの寺院と2本の石柱がこの広場の空間構成に大きな役割を果たしているためか、神聖な雰囲気をも漂わせている空間である。

こうした緊張感があり、品格を感じさせる広場は、例えばイタリアなどのいくつかの広場などにあるのだが、ここには人々を包み込むような優しさ、故郷の大地と交感するような居心地の良さがある。アジアの国々のそれに共通する優しさ、居心地の良さだ。

そして広場には生きる人々の姿がある。毎日朝夕には市が立ち、賑わう。輪を転がして遊ぶ子供、露天のアイスクリーム屋に群がる子供たち、幾人かで輪になってなにやら立ち話をする老人達、寺院の軒下の石段に腰掛けて憩う人達、その石段上でのんびりゲームに興ずる老人や若者達、広場の床に野菜を並べて商売をする人、その値段と品定めをする人達、バケツを持ってきて水汲みに精を出す女・子供達、広場の床に簾を敷いて収穫した米や麦、それに赤唐辛子、唐もろこしなどを干すなど農作業をする人達（特に赤唐辛子は広場に彩りを添える）——こうした人達に混じって鶏がかけずりまわり、牛ものんびりと歩いている。僕は思わず牛に近づいて、怖わ怖わそのごつごつした背中をなでた。そして仲良しになった気がした。

僕が訪れた日はたまたまお祭りの日だったのか、夕方近くになると赤やピンクの鮮やかな衣装で着飾った女達で広場は次第に埋め尽くされていった。女達は広場正面のダットトレヤ寺院でお参りをし、それぞれ手にしたお供え物をロウソクが立てられた祭壇にお供えしていた。祭は度々この寺院前の広場で繰り広げられ、広場は祝祭空間となる。

この広場は「生きられる広場」だ。

「偶然に形成された広場の魅力」

バクタプールがパタンの支配から独立してマッラ王国として力を蓄えた13世紀から14世紀にかけての時期には、この広場はバクタプールで最も重要な広場だったというが、道の結接点が広場形成の契機となるのが通常で、当初はそんな小広場であったのではあるまいか。今日見るような広場の原形が形成されたのはバクタプールが都市として最も繁栄した時代、「一本の樹から作った」と伝説があるヒンズー教のダットトレヤ神を祭るダットトレヤ寺院と、広場西北端の仏塔のラクシュミ・ナラヤン寺院の2つの寺院が建立された15世紀である。また西端のヒンズー教のビムセン寺院が建立されたのが17世紀であり、19世紀半ばにダットトレヤ寺院の庇が増築され、同時期にガルダ（金翅鳥）像と獅子像が頂に乗っている2本の石柱も建てられたというから、400年をかけて順次整備され、今日見る広場が完成したのは150年程前ということとなる（注4）。

東西に細長い矩形の広場の東端中央のダットトレヤ寺院と西端中央のビムセン寺院とは一つの軸を形成している。広場全体の空間をひきしめ対峙するように立つ2本の石柱はほぼこの軸線上にあることから、この軸線は強調される。つまりこの広場は明快な軸線を有し、また東のダットトレヤ寺院に向かって緩い勾配があり、基壇の上にダットトレヤ寺院が立つことからこの寺院が広場空間を大きく支配していること、広場を囲む建物（その多くは「マトゥ」というヒンドゥー教の僧侶の住居）は寺院に限らずどれも軒の出は大きく、美しく堂々たる形態をしているところから、広場は整った美しい空間となっている。

他方、細部を見ると、南側の建物は微妙なカーブを描き、北側のそれには出っ張り・引っ込みがあり広場は不整形である。またラクシュミ・ナラヤン寺院は西北隅に位置するし、ビムセン寺院の前に祭の時舞踊の舞台となる基壇状のテラスがあるが、これが前述の中央軸と微妙にずれている等々、均整を保つ広場全体の印象に対し、不整合な部分も多い。これらの存在が、つまり均整を保とうとする部分と不均衡へと傾斜する部分とのせめぎ合いが広場全体を生き生きとさせているのではあるまいか。ある一人の計画者のプランにもとずいて完成した広場ではない。

例えば周囲を列柱に囲まれた楕円形のローマのサン・



図11, 12 広場東部分。祭りが繰りひろげられる。

ピエトロ聖堂前広場や、これも周囲を一定の高さとそれに古典様式とで統一された堂々たる建物ファサードに囲まれた八角形のパリのヴァンドーム広場は最も美しい広場の一つとして有名だ。だが大きなスケールにも拘わらずそれを構成する各建築は一人の建築家あるいは計画家の資意のもとに統一され、美しい広場には違いないが、時を過ごすうちにその単調さに次第に退屈してくるのも僕一人ではあるまい（注5）。

住まいのあり様について室内の空間はもとより、床に敷くじゅうたんからテーブル・椅子そして食器にいたるまで一人の建築家によってデザインされた美しい住空間の是非についての論議がこれと関連して思い起こされるが、これも広場と同じだ。椅子にしても、例えば祖父母が長年使ってきた座り心地の良い素朴な形の椅子、父や母が使った椅子、それに最近自分が気に入って購入した椅子というように、家の歴史を物語りあるいは個性を持った座り心地の良いいろいろな椅子を使うほうが、統一的にデザインされたものののみを使うよりよほど生き生きとした、何年たっても退屈しない住空間ではあるまいか。

ダッタトレヤ広場は15世紀より19世紀まで数百年の

年月をかけ、寺院や建物が建てられ形成されてきた。その時時の人達が必要となった建物を、その時時の広場との関係性を考えながら知恵を絞って（建築家のように専門的な知識を生かした思考方法ではないにしても）建設したのである。ジムセン寺院の建設時においては、ダットレヤ寺院との明確な軸線形成への意思が読みとれ、そうした広場の整備が要請されたのであり、緊張感がある美しい広場となり得たのだ。このようにその時時の必要に応じるかたちで建物が建てられ広場に通じる細街路も作られ、永い時間の集積の中で、今日見る広場が形成されたのであり、広場全体としてはいわば「自然発生的に」、あるいは換言すると「偶然に」形成されたのだといえよう。いつまでもこの広場で時を過ごしていても退屈しないのは、そうした背景がある。

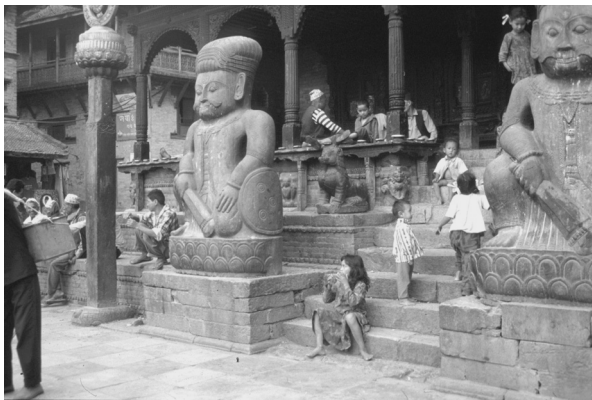


図13 ダッタトレヤ寺院の軒下や階段で座って憩う住民。巨大な力士像が寺院を守る。

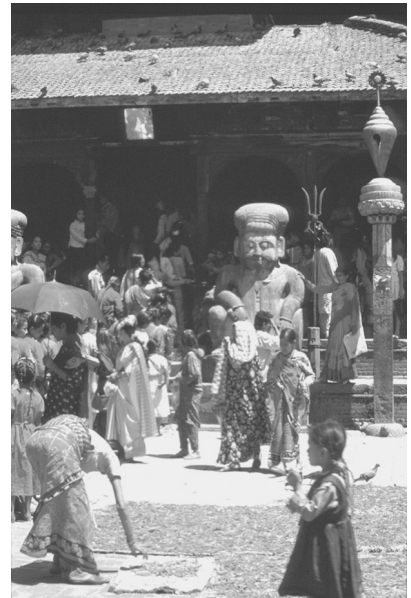


図15 広場の寺院前に箆を敷いて農産物が干される。



図14 広場中央部分。子供達が生き生きと遊んでいる。



図16 広場西部分。舞台ダブはさまざまに使われる。左に水汲み場がある。

「広場では、時間を限って多様な使われ方がされる」

ダットトレヤ広場には3つの寺院が直接面しているところから、ヒンズー教や仏教に関連したお祭りが度々繰り広げられる——祝祭空間となる。

またビムセン寺院の前に「ダブ」と呼ばれる8m×8mほどの広さ、床から40cm-1mの高さのテラス状の舞台がある。毎年5月にはここで14日間にわたって80人からの多数の踊手によって宗教劇が演ぜられる——広場は演劇空間ともなる。

こんなお祭りの時以外でも、広場には人が多い。人々是一日の多くの時間を広場や街路など戸外で過ごす。住居群は高密度であり、それに大家族制だから狭い私空間で一日中過ごすには窮屈なのだろう。気候は夏でも本格的な暑さにならず、一年中いつでも温暖であるし（注

6）、街路や広場、パティや公共水場「ヒティ」それに溜池などの公共空間が大きな面積を占めており、こうした公共空間が狭い私空間を補完する役割を果たしている。今日でもヨーロッパの人達が好んで戸外を生活空間としているのは、古代のギリシャ人は一日の大部分を戸外で過ごした（アリストテレスやプラトンなどの哲学者達でさえも戸外で思索したという）、その風習の名残りだともいわれるが、バクタプールの人達にとっても住居は生活のほんの一部分の生活空間に過ぎない。

この広場には座る場所が多いことが目につく。ダットトレヤ寺院の軒下の階段や回廊、ビムセン寺院の1回部分のパティ、それに舞踊の舞台もそうだ。また周囲の建物は一種の基壇の上に立っているし、この基壇の高さは腰掛けるには好都合の高さだ。人々はこうしたところに腰掛け、眺めたり、おしゃべりしたり、ゲームをしたりして時間を過ごす。

こうした憩いの場のみではなく、広場は仕事の間でもある。広場には簾を敷いてその上に季節によって赤い唐辛子や唐もろこし、米、麦などが広げられる。広場は鮮やかに彩られ、また活気に溢れる。収穫した農産物を乾

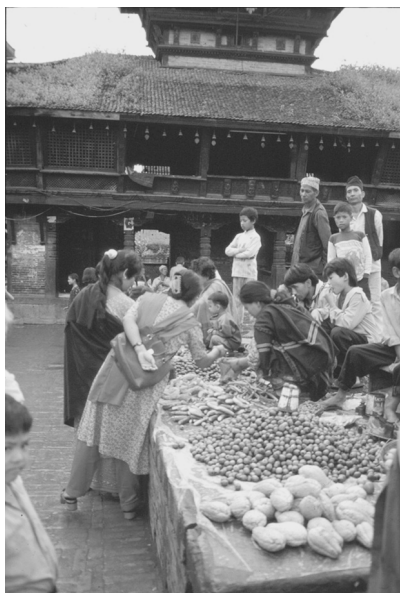


図17 広場西部分にある舞台ダブで、農産物をひろげて売っている。



図19 広場西部分。西北隅のラクシュミ・ナラヤナン寺院が向こうに見える。ビムセン寺院を守る獅子像を頂に戴く石柱が美しい。



図18 露店が店じまいをすると、どこからともなくグティの人が現われ片づけ、清掃する。



図20 ビムセンヒティ。水を汲んだり、体を洗ったり、洗濯する人達で賑う。

燥させる農作業の場となるのだが、これはこの都市の大部分の住民が農民であるからだ。畑は都市の外にあり、住民は都市の住居から畑へ「通勤」する（注7）。1階部分に家畜小屋があったり、農作物の倉庫となっているのはそのためだが、都市全体が懐かしい土の匂いに包まれているのもそのためだ。気候は一年中温暖で土地も肥沃であることから2毛作が行われ、農業で自給自足するから、住民の誰もが食べて生きていけるだけの最低の生活は保証されている。それに社会を支配しているカースト制による人々の心の中の諦観という背景もあるのだろうが、人々はいがみ合うことも少なく分相応の生き方をしているのだろう。こうした温和な住民と動物達によって「広場は生きられて」いる。

ところで広場で、屠殺し、解体作業をする肉屋も、籾を敷いて米や麦、唐辛子などを乾燥させるなどの農作業をする住民も、舞踊の舞台である基壇状のテラス「ダブ」



図21 広場の北東隅におかれた文様を描く石。病気治療を祈って、四隅の穴にローソクを灯し、供え物を捧げる。

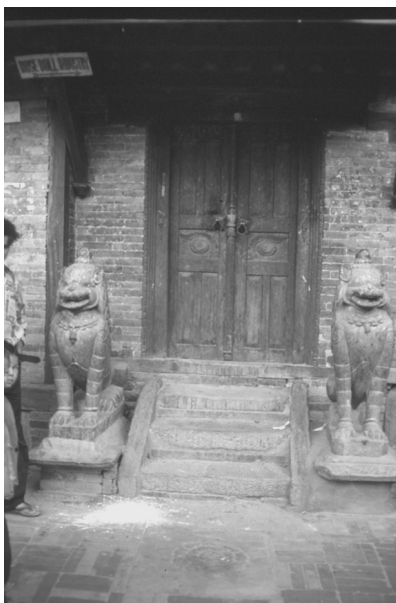


図22 ビムセン寺院前にも、守護神が宿る石がおかれている。

上で自作の野菜を広げて商売を始める人達も広場全体を一人で占拠するようなことはない。だから広場のあちこちで、いろいろな作業が、いろいろな行為が、お祭りが同時に繰り広げられる。

また長時間にわたってその場を占拠するようなこともない。作業を終えたり、青空で開かれていた露店が店じまいすると、何処からともなくそのあとを清掃する人が現われ（上述の「グティ」）、きれいに片づけ、清掃される。そして次の人がその場を使用する。

広場はこのように住民の実存に欠かせない存在である。だからこそ規則などは無いにも拘わらず、互いに譲り合って使うのであろう。共同体の一つの最良のありようをここに見る思いがする。

「神聖な象徴が濃密に漂う広場」

バクタプールは神々に守られた都市だ。9世紀の創建とされるが、マンダラ図に象徴的に示されているように、都市の四周、東西南北はもとより、東北、東南、西南、西北と8つの方角の地に女神ドゥルガに捧げられた寺院が立ち、都市を守る。都市はこのように宇宙化されてはじめて人々が住み得るという（注8）。

ネパールのインドに近い亜熱帯地域はヒンズー教の文化圏であり、北のヒマラヤ山岳地域はチベット大乘仏教文化圏である。この中間に位置するネパール盆地は両者が重なり合った地域である。ヒンズー教と仏教とが区別し難いほど混融しているが（注9）、最も古い都市であるパタンには仏教寺院が多く、このバクタプールにはヒンズー教寺院が多いという。

ダットトレヤ広場に面して立つ美しいダットトレヤ寺院はヒンズー教寺院で、なかにはブラマ・シバ・ヴィシスの神の像が安置されている。この寺院の入口を守るのは2人の巨大な力士像。伝説上の英雄で、普通の人間の10倍以上もの力持ちであるというが、ユーモラスで穏やかな表情は仏像のそれに共通する。広場に優しさ、和みを加えるエレメントでもある。またビムセン寺院もヒンズー教寺院だが、1階部分はパティになっており、2階部分が本来の寺で、シヴァ神の化身とされる等身大のビムセン像が安置されており、その周囲には宿泊・休憩のための空間となっており、かつて巡礼者によって使われていたと思われる。また1階部分から階段を降りて行くといろいろな像が安置されているビムセン・ヒティ（公共の水場）に通じ、これがダットトレヤ寺院-ビムセン寺院の同じ軸線上に形成されており、広場の（延長）部分といってもいい。ビムセン寺院はその立地上から、このように寺院としては珍しい構成となっている。

広場の中で対峙するように立つ2本の石柱はそれぞれ従者として寺院を守るものだが、ダットトレヤ寺院を守るのが、人間の顔を持つガルダ像を頂に戴く石柱だ。彫刻が施されていて、プロポーションも良く、それ

自体美しい。高さは12 m 程だろうか、もう一方の石柱より高い。ガルーダは金翅鳥と訳され、想像上の大鳥で、翼は金色、口から火を吐き、竜を好んで食らうという。美しい像だが、この石柱は「宇宙の似姿としての亀」の上に立っている。ビムセン寺院を守るもう一つの、これも亀の上に立つ石柱は獅子像を頂に戴く。寺院もそうだがこれらの石柱は天へ向かって厳然と屹立する——悠久の天上への信仰が表徴される。広場に神聖の次元が加わる。

広場の下方、神々が宿る大地へと目を向けると、ところどころに特別な形をした石が置かれている。小石で四角い文様を描いたものや、基壇状テラスの舞台「ダブ」の四隅には蓮の花をかたどった石が埋め込まれている。舞が奉納される時には、この石の中央の窪みに油が注がれ、火が灯される。あるいはとりわけビムセン寺院の周りに多いが、小石が置かれていたり、その側壁に穴がけられていたりしている。それらは豊穡の神や病氣治療の神々のシンボルである場合が多い。病気になる人々は全快を祈り、野菜や果物などをお供えしたり、ローソクを灯して献灯する。

この広場にかぎらずどの家の敷居の前にも、守護神が宿る石が置かれているし、1階入口ドア近くの床には穴がある。この家を訪れた神の足跡を象徴化するものだ。

この都市にはネパール語で「米の都市」を意味するバドガオン、あるいはネワリ語で何故か不可解だが「凍った都市」を意味するカパ、それにサンスクリット語で「信心深い人々の都市、信仰の都市」を意味するバクタプールと3つの呼び名があるが(注10)、神々の象徴が濃密に都市に存在し、それを信ずる人々の都市としてバクタプールの名こそ最も相応わしい。

日が暮れて夕闇迫るころ、広場のあちこちで家族の病気の全快を祈る人々、子供の安産を祈る人々、いろいろな悩みや願いを抱えた人々が神に奉納する灯明に火をともし、神々の宿る聖なる石を囲み祈る——広場のあちこちに風によって揺らぐ灯明によってぼっと照らし出さ

れた祈りの空間が生まれる。美しくも聖なる広場の景観である。

注

注1：したがって正確には煉瓦造と木造の混構造

注2：神棚の上(方)を人が歩いてはいけない。日本の風習も同じである。

注3：大きく捉えれば、ダッタトレヤ寺院の東側の小広場やビムセン寺院の西側の公共の水場ビムセンヒティもダッタトレヤ広場の一部とも考えられるが、使われ方等を考慮してここでは上述の範囲に限った。このように広場を解釈しても、広場の意義を論ずる本文ではあまり変わりがないからである。

注4：19世紀に倒壊し、これを機に再建・整備された。G・アウエル+N・グチョウ「バクタプール」1974、ダルムシュタット工科大学刊。なおバクタプールの都市社会、都市構造等について、この著書を参照するところが多かった。またダッタトレヤ広場の細部の構成については、卒業論文研究として現地にて行われた実測調査、使われ方の実態調査(天野聡子：国土館大学工学部建築学科平成11年度卒業論文「ネパール、バクタプール、ダッタトレヤ広場の実態調査・研究—その使われ方・構成・さまざまな象徴」)を参照した。

注5：ローマのサン・ピエトロ聖堂前広場はG・ベルニーニの設計によって17世紀中葉に完成。パリのヴァンドーム広場はJ・アルドゥアン・マンサールの設計によって17世紀末に完成。

注6：「決して本格的な暑さにならず、常に快適……気温10℃—20℃と変動……昼間の最高気温と最低気温にもばらつきがない……最も不快な時期は、モンスーン直前の5月である……」トニー・ハーゲン著、町田 靖治訳「ネパール—ヒマラヤの王国」1989、白水社刊。

注7：バクタプールの人口は3.6万人、そのうち90%は農業に従事(1970年当時)。G・アウエル+N・グチョウ、前掲書。また農繁期にのみ、畑の隅に作った小屋に寝泊まりする。

注8：カトマンズにおいても女神カリ、パタンにおいては女神バルクマリに捧げられたそれぞれ8つの寺院が都市の四周に立地し、守護する。

注9：川喜田二郎他著「ネパールの集落」1992、古今書院。

注10：G・アウエル+G・グチョウ、前掲書。